

「歴史文化」をみつめ・そだて・つなぐ

古民家空き家を活かす

美浜町での取り組み

石田 富男

黒い木造の「鎧冪いの家」の町並み。美浜らしさを感じる風景だ。しかし、このような家が空き家になり、そして壊され、どんどん減ってきている。美浜らしい古民家を活かすことで、地域の活性化や魅力づくりにつなげよう。行政と大学の連携した取り組みを紹介する。

住生活基本計画の取り組みをきっかけに

美浜町住生活基本計画で位置づけられた「空き家活用プロジェクト」。空き家と増えている戸建住宅が多く、その数が急増している中で、空き家を「負の遺産」として捉えるのではなく、個性ある町並みや良好なコミュニティを形成し、定住・移住を促進する「地域資源」として捉え、その有効活用をめざすものだ。

その一つである空き家バンクについては他都市での取り組みも参考にしながら制度の魅力化について検討をすすめ、十二月からスタートした。

もう一つの取り組みが、日本福祉大学 児玉研究室・吉村研究室と連携し、昨年度から、実際の空き家を対象に交流の場づくりなどの活用を推進しようとするめてきたものだ。昨年の取り組みの中で美浜らしい古民家空き家が見つかり、所有者に活用実験の提案をしていた。所有者のご理解のもと、二回の実験を実施することができた。

高齢者を対象としたサロン

一つめは七月に実施した高齢者を対象としたサロン。美浜町では公民館などでボランティアによる高齢者サロンが実施されているが、その実施場所として古民家を使ってみたいということで模擬的に実施したものだ。

懐かしさのただよう古民家で、昭和イズや昔の写真を見ながら、昔のことを語り合った。回想法にふさわしい空間の中で、参加した大学生もその雰囲気を楽しんでいた。地域の高齢者と大学生との交流の場ともなった。



高齢者を対象としたサロン

子育て中の親子を対象としたサロン

二つめが十一月に実施した子育て中の親子を対象としたサロン。七月の経験を踏まえ、学生が企画・運営したもので、子ども達と学生が一緒に遊び楽しむことで、お母さんたちに子育てを離れくつろいでもらおうとともに、地域の人たちと交流するきっかけをつくらうというもの。「お兄さん・お姉さんと遊ぼう」と銘打

ち、工作づくりや庭探検、バルーンアートを楽しんだ。「くつろぎカフェ」では飲み物とお菓子でお母さんたちにくつろいでもらった。最後は大学サークルの人形劇があり、子ども達が夢中になっていた。地域の子育てサークルに参加を呼びかけ四十名以上の親子が参加。学生も三十名以上参加し、いつもは静かな家が賑わい、輝いているようにも思えた。



子育て中の親子を対象としたサロン

地域の資産としての活用

この古民家は所有者の両親が亡くなり、長らく空き家になっていたが、月に一度は手入れに通われており、所有者の建物に対する愛着が感じられる。また、美浜らしい黒壁を有する建物で築二〇〇年と伝えられ、地域の歴史的景観にも寄与している。十月には「あいちヘリテージマネージャー養成講座」において「私が見つけた登録文化財」として発表され、周囲の町並みを含めた保全の重要性が指摘された。

地域の資産として保存・活用していくことが望まれるが、活用にあたっての課題は多い。まずは、古民家の魅力を多くの人に共感してもらい、保存・活用に向けた機運醸成を図っていくことが重要ではないかと思う。実験に参加した人から「ぜひ続けてほしい」という声も聞かれた。町と大学の連携した取り組みとして継続されることを期待したい。

オープンアーキテクチャ

あいちトリエンナーレ2013 プレイベント

堀内 研自

オープンアーキテクチャとは

「オープンアーキテクチャ」とは、日頃あまり見ることのできない建築物を一般に公開するイベントのことで、建物見学を通して地域のまちづくりに貢献しようとする試みである。今回、あいちトリエンナーレ2013のプレイベントとして開催されたオープンアーキテクチャの様子をレポートする。公開された建物は中区の天津橋交差点にある「愛知県庁天津橋分室」と「伊勢久株式会社本社」である。

オープンアーキテクチャとまちづくり

では、建物を公開することが、どうまちづくりに繋がるのか。それは、すぐれた建物には、その所有者や関係者にとつて「誇り」となる部分があり、それを一般へ公開することで価値ある地域の「財産」と高めていこうとするねらいがある。

それには価値を理解してもらい、それが根付いていく工夫が必要だ。そもそも建物の見学ツアー自体珍しいものではないが、この企画は特定の目的に特化した観光「SIT(Special Interest Tour)」と呼ばれるものにあたる。最近は今までの物見遊山的な観光が飽きられ、「SIT」の



天津橋分室階段室
美しい曲線を見せる階段室。昔の事務所ビルは階段室が建物の大きな見せ場だった。



左：伊勢久(株)本社、染色薬品などを扱う創業250年の会社の本社屋。
右：愛知県庁天津橋分室、もとは金融機関、現在は県史を編さんする事務所。

人気が高まっているようだ。そこで、重要となるのが建物の「つくり手」や「つかい手」の参加である。イベントでは、公開する建物に、実際に暮らしておられた方、施設の担当者、設計者など、その建物にゆかりのある方々に来てもらい、見学者に建物にまつわる話を直接聞かせ、趣向となっている。今回のツアーでは、以前これらの建物の調査を行った名古屋大学名誉教授の瀬口哲夫先生がガイドを務めた。建築の意匠について、実物を前にしての解説は一般の人にも分かりやすく、いっそうこの建物への興味が湧いたことだろう。

やはり普段入ることのできない名建築に入れたり、ガイドブックには載っていない関係者の生の話を聞いたりするのはとても魅力的である。また、「SIT」の参加者は、その分野への関心が高く向上心のある人が多いので、イベント参加をきっかけに、その後のまちづくりに協力してくれる人も現れるようだ。こうして建物の価値や魅力の再発見が熱心な参加者を生み、新たな情報発信を行うことで、まちのブランド力や集客力の向上につながっていく。